れる。而も善い土地を。私はこんな土地を見たことがありません。』

通辯はそれを翻譯した。バシユキル人は口々に話し續けた。バコームは何を言つてるのか分からなかつた。併し彼等は心の善い連中であること、それからありたけの聲を出して話したり笑つたりして居ることが解つた。それから彼等は暫く默つて了つてバコームを眺めた。すると通辯は言つた。

『斯う申して呉れと言ふのです。あなたの御親切に酬ひるために、幾何でもあなたの望みだけ喜んで差し上げます。どれ位か一寸言つて見て下さい――さうすりや貴方のものになりませう。』

彼等は尙ほ何か言ひつゞけて居たが、やがて憤つた樣な口調で口

論を始めた。バコームは何故口論して居るかを訊いた。

通辯は答へた。

『酋長に話して、其の承諾がなければ出來ないと言ふものと、酋長が居なくてもいゝと言ふものと居るんです。』

六

バシユキル人等は口論して居た。と突然狐皮の衣服を着た男が入つて來た。

皆な默つて了つて立ち上つた。そして通辯が言つた。

『酋長は此人です。』

パコームは間もなく最もよい毛氈を取り出し、五ポンドの茶と一緒に酋長に與へた。

酋長はそれを受取り、上座に坐つた。みんな早速彼に事情を告げた。

酋長はぢつと聞いて居た。皆に默つて居れといふ合圖に頭を振つて、それからパコームに向つてロシア語で言ひ出した。

『え、よろしい。何處でも好きな所を取りなさい。澤山ありますから。』

『欲しいだけ手に入るだらう。』とパコームは獨語を言つた。早速自分のものにして了はねばならぬ。でないと、また取り返されて了ふ

から。

『お言葉で有り難うございます。あなたが澤山土地を持つて居られることを知つて居ります。私はさう澤山は要らないのです。どうか恐入りましたがどれだけ下さるか仰しやつて下さい。出來るだけ早くそれを測つて確に私のものにして貰ひたいのです。人の生命といふものは分らんもんでして、あなた方の樣な善いお方が許して下さるんですが、またお子達がそれを取り返す樣な時が來ないものでもありませんから。』

『その通りです。確に君のものにしなくちやなりません。』と酋長は言つた。

バコームは切り出した。

『聞きますと、此處に一人商人が來て居つたといふことで、その商人にあなたが賣買の約束で土地をお與りなさつたさうでしたが、私もそれと同じにして貰ひたいものです。』

酋長はすつかりバコームの心中を了解んだ。

『その通りにしませう。書記が居りますから、町へ行つて其手續しませう。』

『代價は幾何程でせう?』とバコームは訊いた。

『代價は一つです。一日に千ルーブルです。』

バコームには解らなかつた。『如何いふ勘定ですか、その一日とかいふのは? 幾デシャチンです。

『それは勘定は出來ません。けれど私達はそれを一日に幾らと賣つて居ます。君が日の中に歩き廻られるだけ——それだけ君の所有です。そしてその一日分の代價が千ルーブルといふんです。』

バコームは喫驚した。

『ようございますか。私が一日に歩き廻られるだけなら、中々ですよ。』と彼は言つた。

酋長は笑つた。

『それはみな君のものです。たゞ約束があるんですよ。もし君が其日の中に出發したもとの所へ歸つて來なければ、金はふいになるん

ですよ。』

『では、私が廻つて來る所をどうして解る樣にするんです？』

『よろしい。私共は何處でも君の好きな所に立ちませう。そこに立つて居ませう。そこで君はかう廻つて來ねばならん。鶴嘴を持つて行つて、何處でも好きな所に記號をつけなさい。曲り角へ來たらそこに小さな穴を掘つて其中へ何か芝草でも入れときなさい。私共は犁をもつて其の穴をためて歩きます。どれだけでも好きなだけ境界を廣くなさい。たゞ日の入り迄にもとの所へ歸つて來なくちやいけません。さうすりや君が歩いた圍の中はすつかり君のものです。』

バコームは喜び上つた。彼等は朝早く出掛ける約束をした。それから又その話をし、馬乳酒を飲み、羊肉を食ひ、茶を飲んだ。もう日暮になつた。バコームに寢床をこしらへてやつて、バシユキル人はそれ〴〵歸つて行つた。彼等は明朝未明に一緒に集つて來て、日の出と共に出掛る約束をした。

七

バコームは寢床の上に横になつた。彼は自分の得る土地のことを考へて、眠ることが出來なかつた。

彼はつぶやいた。

『己は素敵に廣い土地を手に入れることになる。己は一日に五十ヴエルスト歩ける。今は一日が一年の價になるんだ。周圍五ヴエルストだと隨分の土地だ。己は其の中の惡い所を賣るか。又は百姓共に貸すかしよう。そして己は好い所を選つて、そこへ移住しよう。二頭牛の犁を使つて、二人の作男を置かう。自分で五十デシヤチンスを耕して、殘りを家畜のための牧場にしよう。』

彼は徹夜まんじりともしなかつた。ほんの曉方になつてとろ〳〵となつた。一寸とろ〳〵としたと思ふと夢を見た。何でも誰かゞ此の同じ天幕の中で寢て居て、くつくつと笑つて居るのを聞いて居る樣だつた。それから彼は誰が笑つてるのか見ようと思つて、起き上つ

て天幕の外へ出た樣だつた。するとこは如何に！　あの同じ酋長が天幕張の家の前に坐つて居て、其腹を抱へて何かしら大袈裟に笑ひ叫んで居るのであつた。

彼は其の側へ行つてそして尋ねた。

『何をそんなに笑つてるんです？』

すると最早其男は酋長ではなくて、いつか彼に此處の話をした旅商人であつた。

彼は旅商人だといふことを知るや否や斯う尋ねた。

『お前さんは此處に長く居たのか？』

さうすると今度は最早其の旅商人ではなくなつて、ずつと〳〵前

にヴォルガ河を下つて來たあの百姓になつて居た。

それからバコームは、その男はもうあの百姓でもなくて、角や蹄の生えた惡魔が、そこに坐つて笑つて居ることを知つた、惡魔の前には襯衣と股引とを着た裸足の男が横はつて居た。バコームは其男が誰かしらと、一層よく注意して見た。

所が其の死んだ男は、誰あらう——彼自身であつた！　バコームは仰天して眼が覺めた。

彼は眼を覺ました。

『何といふ夢を見て居たんだ？』と呟いた。彼は四邊を見廻し、閉された戸の隙間から外を覗いて見た。もう既に明るくなりかけて夜

が明けんとして居た。

『皆な起きてるに違ない。もう時間だ。』と思つた。

バコームは起きた。馬車の中の下男を起して、馬具をつける樣に言つて置いて、それからバシユキル人を起しに行つた。

『時間だ、もう野へ測量に行く時間だ。』と彼は言つた。

バシユキル人は起きて皆集まつた。酋長も出て來た。一同はまた馬乳酒を飲み始めた。彼等はバコームに茶を驕る樣にと所望したが彼はぐづ〳〵して居られぬ氣持になつて居た。

『もし出かけるんなら……もう出掛ける時間だ』と彼は言つた。

八

バシユキル人は準備をした。或者は馬に乘り、或者は車に乘つて出發した。バコームは下男と共に馬車に乘つた。鶴嘴を持つて居た。一同は曠原へ出た。夜は明けかけて居た。彼等は一つの岡に着いた。皆なそれぞれ馬や馬車から降りて一所へかたまつた。酋長はバコームの傍へ來て、手で指し、

『此處がすつかり眼の屆く限り己達のだ。君の好きなだけ取りなさい。』と言つた。

バコームの眼は燃える樣に輝いた。見渡す限りの野は青々として

草が繁つて居る。掌の樣に平かに、鍋の如く黑い。凹のある所は、人の高さ程の草が一ばいに生えて居た。

酋長は狐皮の帽子を脫いで下に置いた。

『さあこゝが基點だ。こゝから出掛けて、こゝへ戻つて來るんだ。君が廻つて來る所はみな君のものだ。』と言つた。

バコームは金を出して、其の帽子の中へ入れた。衣服を脫ぎ、半襦袢一つになり、帶をぐる〳〵と腹のまはりに卷きつけて、がつと固く結び、首にパンを入れた袋をぶらさげ、小さな水筒を帶に挿し、脚絆を締め直し、下男から鶴嘴を取つて、出發の準備をした。

彼は何方側から始めようかと考へ〳〵た。何處も彼所も善い所だ

つた。

彼はつぶやいた。

『何處でも全く同じことだ、己は日の出に向つて行かう。』

彼は東に向いて彼所此方歩きながら、太陽が地平線に上るのを待つた。

『時間を潰すまい。今日は涼しくて歩きいゝ。』と獨語つた。

日光が地平線上に現はれるや否や、彼は鶴嘴を肩にかけて、そして曠原を出掛けて行つた。

パコームは遲くも速くもなく歩いた。一ヴエルストほど行つた時に、彼は立ち止つて、小さな穴を掘つて、眼につく樣にそこへ芝を

投げ入れた。

更に進んで行つた。行くに從つて足を早めた。行きながら他の小穴を幾つも掘つた。

パコームは四邊を見廻した。まだかの岡は見える所にあつた。一同はその上に立つて居つた。自分の馬車の車輪が朝日に輝いて居た。彼は五ヴエルストも來たと想つた。暖かくなりかけて來た。襦袢を脱いで肩にかけて、歩き續けた。すると暑くなつて來た。彼は太陽を見た。もう朝食時であつた。

『これで一ときり終つた。四度で一日になるんだ。まだ方向をかへるのに早過ぎる。どれ靴だけ脱げ。』と彼は思つた。

彼は腰を下して靴を脱ぎ、帶にぶらさげて歩き出した。足が輕くて歩きよくなつた。『もう五ヴエルスト行け、それから左へ曲らう。此邊は馬鹿に宜い、此處を捨てるのは惜しい。』と獨語した。

だん〳〵行くに從つて、土地は益よくなつた。で尙ほ眞直に進んで行つた。彼は振り返つた。――岡は今は殆ど見えなくなつた。そして人々は小さな蟻の樣になつて、その上に黑い點をなして見えた。何か知らぬが光つて居た。

『よし、これで此方向へ充分來た。もう曲らねばならぬ。隨分な汗だ。水が飲みたくなつた。』

彼は立ち止つて、穴を掘り、芝を投げ入れ、水筒をゆるめて水を

飲んで、そしてかつきり左へ曲つた。彼は歩きに歩いた。――草は深くなり、日は暑くなつた。

彼は疲れを覺え始めた。太陽を見ると晝飯時であつた。

『どれ、一休みしなくちやならぬ。』

彼は立ち止つた。そして座つてパンと水とを出した。併し決して横にならうとはしなかつた。彼は獨語を言つた。

『もし横になつたら、眠つて了ふかも知れない。』

暫く坐つて居たが、それからまた出掛けた。彼は樂に歩けるなと思つた。食事を取つたので、元氣が回復したが、今や非常に暑くなつて來た――さうだ。そして太陽が傾き始めた。併し彼は尙ほ歩き

續けた。彼は言つた。

『一時間辛抱せい、さうすりや一代食へるんだ。』

彼は尙ほ同じ方向に向つてずん〳〵進んで行つた。左へ曲らう曲らうと思つて行くと、こはいかに！　そこは低濕の地となつて來た。それは見捨てるには惜しかつた！　で獨語を言つた。

『今日は當り日だつた』

彼は尙ほも眞直に進んで行つた。低地へ入つた——その谷ともいふべき低地の向ふ端に穴を掘つて、それから第二の角へ來た。

バコームは岡の方向を見かへつた。熱氣の爲めにぼうつと霞んで空氣は震へて居た。それを通じて岡の上の人々が辛うじて見えた。

『よし、今の側は長かつた——今度は少し早く曲らねばならぬ。』

斯う言つて第三の側を歩きだした。——彼は足を早めようとした。太陽を見た——もうずつと西に傾いて居た。そして第三の側はたつた二ヴエルスト行つたばかりで出發點の方へ向つた。そこからまだ十五ヴエルスもあつた。

『さうだ、道が平でなくても、眞直に大急ぎに歸らねばならぬ、あまり慾ばるといけない。これだけでも、もう餘程の土地だ。』

バコームは大急ぎで穴を掘つて、眞直に岡に向つた。

バコームは岡の方へ眞直に急いだ。それはもう彼にとつて苦しい仕事となり出した。彼は汗みどろになつて、裸足の足には切創やら擦り疵やら出來て、自由が利かなくなりだした。休息したいと思つたが、それは不可能であつた。彼は日沒まで休むことが出來なからう。太陽は少しも猶豫しないで益々低く沈んで行つた。

『あゝあ！』と彼は呟いた。『おれは馬鹿間違をやらかしたに違ないかしら？　あんまり取り過ぎたに違ないかしら？　何故おれは早く急がないか？』

彼は岡を眺めた。――そこは太陽に照らされて居た。まだそこまでは大分遠い。而も太陽はあまり高くない。

尙ほ〳〵バコームは急いだ。中々苦しかつたが、彼は益々足並を速め速めした。歩いても歩いても――いつまでもまだ遠かつた。彼は足並を二倍にした。彼は襦袢も、靴も、水筒も捨てゝ了つた。遂には帽子までも脱ぎ捨てゝ了つた。が鶴嘴だけはしつかり持つてそれにたよつて歩いた。

『あゝ、』と彼は獨語をいつた。『己はあまり慾が深か過ぎた。すつかり駄目にして了つた。日の入までに迚も歸れない。』

心配のために呼吸も苦しくなつて來た。バコームは走つた。――襯衣と股引とが汗にびつしよりになつて體にくつついた。――口はねばりついた。胸にはまるで一對の鞴が火を吹いて居る樣だつた。

そして心臓の中にはまるで水車が廻つてる様で、脚はもう殆ど折れさうであつた。

苦しくてならぬ様になつた。彼は言つた。

『勞れきつてで死なうものなら。』

彼は死に倒れるのを恐れた。けれども止ることが出來なかつた。

『こんなに走つて來た後で。今止らうものなら、皆な己を馬鹿だと言ふだらう。』

彼は走り且つ走つた。もう大分近いて來て、皆なの叫いて居るのが聞えて來た。そして彼等の叫くのが、一層パコームを苦痛に感せしめた。

パコームは最後の力を振つて走つた。太陽は地平線の端にさまようて居た。夕靄に包まれて、血の如く赤く、大きく輝いて居た。最早——最早沈みつゝあつた！　太陽は殆ど沈んで了つた。けれども パコームも出立點には、今は左程遠くはない。もうその場所が見えた。岡の上の人々が彼に向つて身振をし、元氣をつけて居るのも見えた。彼には地面の上の狐の皮の帽子も、其中の金さへも見えた。そして彼は地面に座つて腹を抱へて居る酋長を見た。すると昨夜の夢が想ひ出された。

『澤山の土地だ、だが、神は己にその上に住ませることを欲しないんだ。あゝ、己は自分で自分を滅茶々々にした。おれはそれを手に

入れられまい。』と彼は自分に言つた。

バコームは太陽を眺めた。もう既に沈んで了つて居た。形は既に隱れて、最後の光線が地平線の下に消えて居た。

彼は最後の精力を絞り出した。身體ごと飛ぶ樣に走つた。脚は辛つと身體を支へた。

バコームが岡に達すると同時に、俄に暗くなつた。彼は太陽の沈んで了つたのを知つた。彼は唸つた。

『すつかり骨折が無駄になつた。』と思つた。彼は將に止らうとした。けれども尙ほバシユキル人が皆な叫んで居るのが聞えたので、まだ自分が下に居ることに氣がつき、そしてそれ故に太陽は岡の頂に居

る彼等にはまだ見えるんだが、自分にはもう沈んで見えなくなつて居るといふことに氣がついた。バコームは呼吸をついで岡へ駈け上つた。そこはまだ明るかつた。バコームは走つた。するとそこに帽子があつた。帽子の前に酋長が坐つて、腹を抱へて笑つて居た。

バコームは夢を想ひ出して『あゝ！』と唸つた。もう足は自由にならなかつた。そして前の方へ打ち倒れた。帽子の方へ手をさしのべて。

『やあ！　出かした〳〵！』と酋長は叫んだ。『君は大變な土地を儲けたぞ。』

バコームの下男は傍へ走つて行つて起さうとした。併し彼は口か

ら流れる樣に血を吐いて、そして死んで了つた。

バシユキル人は皆な其の舌を鳴らして悲しみの情を表はした。

バコームの下男は鶴嘴を取つて、彼の爲めに墓穴を掘つた。頭から足まで丁度一ぱいに入る樣な——七尺ばかりの——そして彼を埋めた。

三つの死了

大正二年九月十日印刷
大正二年九月十三日發行

（定價金四十五錢）

譯者　加能作次郎
發行者　矢島一三　東京市神田區錦町一丁目十九番地
發行兼印刷者　藤宮吉之助　東京市神田區南神保町十五番地

發行所　東京神田區南神保町振替東京二四四四四番　海外文藝社
東京神田區錦町一丁目振替東京四一二三番　中興館書店
發賣所　東京神田區南神保町振替東京二四八五九番　泰平館書店

不許複製

（日清印刷株式會社印刷）

■新進諸名家飜譯■第一期十二册刊行■

海外文藝叢書

●新型美本 ●定價每册金四十五錢 ●郵税各金四錢●

第一篇 七死刑囚物語 アンドレーエフ氏作 相馬御風氏譯 既刊

第二篇 心の扉 ザイツエフ氏作 昇曙夢氏譯 既刊

第三篇 月光 モウパツサン氏作 中村星湖氏譯 既刊

第四篇 三つの死 トルストイ氏作 加能作次郎氏譯 九月新刊

第五篇 死の歌 ズーデルマン氏作 鈴木悦氏譯 十月刊行

第六篇 處女 ダンヌンツイオ氏作 田中介二氏譯 十一月刊行

第七篇 皇子と燕 ワイルド氏作 本間久雄氏譯 十二月刊行

海外文藝社 東京神田南神保町 振替東京二四四四

■新進諸名家飜譯■第一期十二册刊行■

海外文藝叢書

●新型美本 ●定價每册金四十五錢 ●郵税各金四錢●

第八篇 廿六人と一人 ゴーリキイ氏作 野尻泡影氏譯 續刊

第九篇 枯葉 キーランド氏作 前田晁氏譯 續刊

第十篇 題未定 ストリンドベルヒ氏作 秋田雨雀氏譯 續刊

第十一篇 赤い花 ガルシン氏作 谷崎精二氏譯 續刊

第十二篇 鬼火 チエホフ氏作 伊東六郎氏譯 續刊

本叢書に對する世評の一班…

▲眞摯なる努力汎く江湖に歡迎さる▼

——次頁以下參照——

海外文藝社 東京神田南神保町 振替東京二四四四

アンドレーエフ氏作
相馬御風氏譯

七死刑囚物語

頗美本 全一冊 定價金四十五錢 郵稅金六錢

【早稲田文學評】 讀んで居る中に死刑問題といふやうな單なる個的な事象を離れて何物かの中に知らず〳〵引込まれて行く所に此の作の價値の眞蹄がある。然るに取扱つてゐる題材が極めてセンセーショナルなものなるに拘はらず、結果が少しもセンセーショナリズムに墮ちて居ない點が氏の作の藝術的價値をより確實に裏付て居る。譯筆は多分の經驗と定評とを有して居る相馬氏の事ゆへ嘆々するの要を見まい。

【文章世界評】 露國現存の文豪アンドレーエフの "The Seven who were hanged" の邦譯である、七人の革命黨や重罪犯が、その捕縛から絞首臺に昇る迄の複雜した心理を深刻に描寫したるもので、人生の最も恐ろしい淵の中へ導き入れられるやうな戰慄が感ぜられるが、それよりも讀者は先づ此の文豪の絶大なる創造の力を驚嘆せなければならぬ。

【萬朝報評】 アンドレーエフは露國の現代作家中日本に於て最も多く追慕者を有する作家の一人にして常に第一義要求に忠實なる態度は吾人の賞讃措く能はざる所。此書は七人の死刑囚を材として、死に對する人間生活思想と態度と觀念と恐怖とを描いて、所謂深遠なる人生の意義を暗示せんとせるものにして、自ら生を自覺せるものゝ讀んで悚然襟を正さゞるべからざるもの眞摯輕妙の譯筆覺へず人をして讀過せしむ、吾人は斯の如き好譯の盛なる出版を望んで止まず、心地よき書なり。

【大阪毎日評】 本書はアンドレーエフの傑作で、作者は死刑はどんな條件のもとでも怖ろしくまた不公平なものだと云ふ事を語るつもりで書いたと云ふが、作者の目的が單にそれだけに止まつたにしても、此の書はそれ以上に人生と死との深い意義に觸れて、讀んでゆく内に讀者を得體の知れぬ深い闇に引きずり込み人生のどん底から吹き上る冷たい風に覺へず慄へあがらしめる力がある、此の力はロシヤ文學が傳統で、他國の文藝では味ひ得られない、御風氏の譯は行き屆いた筆だ。

江湖の聲

心の扉

ザイツエフ氏作
アンドレーエフ氏
昇曙夢氏譯

内容 姉、客、狼、獸の呪ひ

定價金四十五錢
郵税金四錢

【文章世界評】 ザイツエフの藝術は、ロシヤの象徵派の中でも最も進んだ高級の藝術として知られて居る。悲痛と憧憬と神祕と――これがザイツエフの藝術を形造る三大要素で、此の集に收めた三篇は、それ々々の意味に於て彼の代表作と見て可い。アンドレーエフに就ては彼是言ふ必要はない。昇氏の飜譯については既に早稲田文學に出たもので本年中この飜譯ほど人を動かした作は日本にないと云ふ定評がある。

【讀賣新聞評】 かうして一册になつたのを通讀すると、この露國現代の二文豪の特色が明かにわかる。憂鬱的な、ネガ、ロマンチストとして、神秘主義者としてのザイツエフの藝術の綜綜として悲しいはかない夢のやうな世界と、アンドレーエフの透徹した觀察と充實した文章、譯者の理解と手練とはこれを傳へるに少しの遺憾もない。

江湖の聲

月光

モウパツサン氏作
アンドレーエフ氏
中村星湖氏譯

内容 月光、寡婦、女王、外國人、外四篇

定價金四十五錢
郵税金四錢

【早稲田文學評】 味ひも色彩も異ふ南北兩歐の藝術を斯く一つに集めたのは面白い便宜な思ひ付きで、讀者は此の一小册子に依つて、現實的實感的な南方藝術と理想的空想的な北方藝術との相違を眼前に味ふ事が出來る。殊に官能派たるモウパツサン、思想派たるアンドレーエフの對照はその相違を更に著るしく見せてゐる。選ばれた諸篇、皆藝術品として相應の價値あるものゝみで、譯筆も申分がない。

【萬朝報評】 海外文藝叢書第三篇にしてモウパツサンの月光外二篇とアンドレーエフの外國人外四篇を收む、評者は近頃流行の聊か狂氣じみた穴ほじりをするに先つて、どこまでも原作の文脈を傳へて南方の現實的實感的官能藝術と北方の理想的思想的藝術の面白き對照を味はしめんと努めた譯者の眞贄なる態度に感謝せずんばあらず。

エドガア・アラン・ポオ氏作　谷崎精二氏譯　【新刊發賣】

赤き死の假面

總布製美本
正價金壹圓
郵稅金八錢

強烈なるポオの作品が近代文藝に爲した影響は目ざましいものである。古今東西の文壇に類例なきものとして世界に珍たるは實にポオの作品である。此の書は彼が多からざる作品中から最も色彩の鮮明な短篇十三を譯したもので、其の一字一句は宛ら寶玉を以て組み上げし如く芳烈なる韻調が紙背に透つて居る。由來、譯し難きを以て世に知られたるポオの作品も、今や譯者の巧妙なる筆に依つて、よく原文の妙趣を窺ふことが出來るのである。

東京南神保町山　泰平館書店　振替東京二四八五九

アンドレーエフ氏作　伊東六郎氏譯　【新刊發賣】

アナテマ

全壹冊
最新型洋裝美本
正價金五十五錢
郵稅金六錢

■露西亞國禁劇■

最近歐米一般社會を驚愕せしめ、毀譽褒貶の聲喧々囂々たると共に、藝術上の傑作と賞讃せられし書に未だ本劇の如きものなし。如何に宗教界を戰慄せしめしかは、本劇が赤裸々たる基督の眞相を暴露せしため興行を禁ぜられ、作者また破門の厄に遇ひたるによりても知らる。たゞ聖書にのみ依り基督を知る者は、本書によつて初めて其の眞相を解せん。

東京南神保町山　泰平館書店　振替東京二四八五九

窪田通治氏著　橋口五葉氏裝幀【再版發賣】

評釋 伊勢物語

定價金八十五錢
郵税金八錢

極めて清新な、さうして艶麗な才筆を持つて批評を試み、且つ精細な註釋を加へたものである。而も其の文藝上の作品として觀たる『伊勢物語』は如何なる價値を有するか、本書を繙かん者恐くは其の興味の甚深なるに驚くであらう。

窪田通治氏著　平福百穂氏裝幀【再版發賣】

空穂歌集

定價金八十五錢
郵税金八錢

氏の短歌と長詩とを蒐めたものである、瀟洒な綺麗な本である。内容も裝釘も一種の異彩を放つて居る。與謝野寛氏は『空穂氏の詩は曙の靜けさがある、夕暮の寂しさがある、有明月の爽淨がある、夕時雨の凄意がある』と言はれた。

中興館書店　東京市神田區錦町一丁目　振替東京四三二一四

モーパッサン氏原著　吉江孤雁氏譯

水の上

上製美本全壹冊
近刊

既に其の譯の全部は終りを告げた。今は專ら銑練中である。『水の上』はモーパッサンの傑作である。が故に譯者は一層の注意を以て努力を盡して居る。從來に於ける孤雁氏の譯筆は既に定評のあるものであるが、本書出づるに及ばゞ更に其の精華を發揮するであらう。

吉江孤雁氏著　小杉未醒氏裝幀【三版發賣】

旅より旅へ

定價金四十五錢
郵税金四錢

その近作二十五篇を蒐む。清新なる筆致と、爽快なる自然の大景と、足れ著者獨特の境地、……酣なる春、緑の天地、爽涼の夏季或は肅條の秋、自然の新生命を味はんとする者にて敢て一本を薦む。

中興館書店　東京市神田區錦町一丁目　振替東京四三二一四

ブランデス氏原著　中澤臨川氏譯【三版發賣】

露西亞印象記

正價金八十五錢
郵税金八錢

イブセンヤ、スチニアードミルに私淑せる猶太人ゲオル、ブランデスの著である。そうして其の傑作の一つである。島崎藤村氏は、曩に『文章世界』誌上で、本書に就いて委しい批評を試み、『苟も文學を愛好する者には、是非此の本を讀ませたい、臨川氏の譯筆は現時の文壇に眞に尊重すべきものである』と賞讃された。然りブランデスを研究することに於て臨川氏は當今第一の人で、而も其の筆致の洒脫なる、よく原文の俤を髣髴されて居るのである。

中興館書店
〔東京神田區一ツ橋町〕
〔振替東京三二一四番〕

迅速、懇篤、誠實の三要素を具備せる

中興館通信販賣部の活躍

新本部

教科書・醫書・洋書・法律書の一部を除き一切の圖書を定價の一割引で賣る。如何に多數の注文でも直に發送し得る用意と機關とを備へて居る其の迅速は生命である懇篤誠實は特徴である特色である

古本部

あらゆる古本を取次販賣する。和書・漢書の古い物は、勿論現代の文藝・學術に關する百般の圖書で恐らく古本でないものはない、往復葉書で照會すれば直に品の有無と實價とを御返事する、古本の通信販賣は蓋し弊館を以て嚆矢とする、これによつて、學校・圖書館及び讀者諸子に非常の便益を供して居る。

注文規定

㊀御注文は前金にて、實價に郵税を添ふること。㊁送金は振替貯金によること。㊂照會は往復葉書によること。㊃注文書には新本又は、古本と明記すること。

中興館書店
〔東京市神田區錦町一丁目〕
〔振替東京三二一四番〕

讀者の福音

▼送費無料書籍取次販賣▲

▼東京市内各書店にて出版する書籍幷に雜誌は如何なる品にても、定價だけ御送金被下候はゞ送料は弊館の負擔即ち送費無料にて迅速御送本可仕候。……御注文の際御送金は、

▼振替貯金口座東京二四八五九番泰平館書店宛、御拂込被下度候、さすれば途中送金紛失の憂無之、他に餘分の費用即ち爲替料、通信費等を要せず至極安全且つ便利に御座候。

▼御購讀せらるゝ書籍の外、他の參考書御入用の場合は往復はがきにて書名御申越被下度、著作者名、實價等、懇切御回答可申上候。

●誠實勉强●發送迅速●

東京神田淡路町保泰館　泰平館書店　振替東京二四八五九

340
25

9.11.15

終